

## 鉄筋コンクリートの変形特性

東京独立大河 正員 栗田二郎  
・ 神山行男

鉄筋コンクリートの高橋脚柱では、耐震性を考慮して鉄骨を挿入するとか一般に行なわれている。しかし最近は太径の鉄筋が用いられるので、これを鉄骨に取り回すことが考えられる。この実験は、直径41mmの高強度異形鉄筋を用いて鉄骨を用いた同形の試験体の曲げ実験を行つて、これと復元率、ひん程、および張筋時の減衰率等を比較検討したもので、小型供試体を用いて、鉄筋と帶筋との結合方法が鉄筋コンクリートの変形特性に及ぼす影響をあらかじめたる、鉄筋と帶筋とを溶接したものを、導入せず(鉄骨で結束)したもの、鉄筋分離試験とひん程試験を行つて比較である。

## (1) 曲げ実験

鉄筋コンクリート柱と正ひん筋鉄骨コンクリート試験体は図1に示す断面を持つ。又スパン中央に上下から載荷できるドロップ式実験台を有している。

スパンモード5mとし、スパン中央以上下から一貫載荷とした。荷重は5t不満で正直の間隔を身元よりう載荷して0.3倍速増加し破壊に至らめた。反応は直角荷重はシヤッタの容積が3.50t未だと見えた。

各荷重段階で、又以降中央の反応力、鋼筋応力及下部のひん筋の引張力を測定した。

(2) 復元性 復元性を $\delta_p/\delta_u$ で示すと図2のようである。復元性は断筋荷重附近ではRCとSCとで大差ないが、降伏荷

図1. 正直ひん筋鉄骨試験機

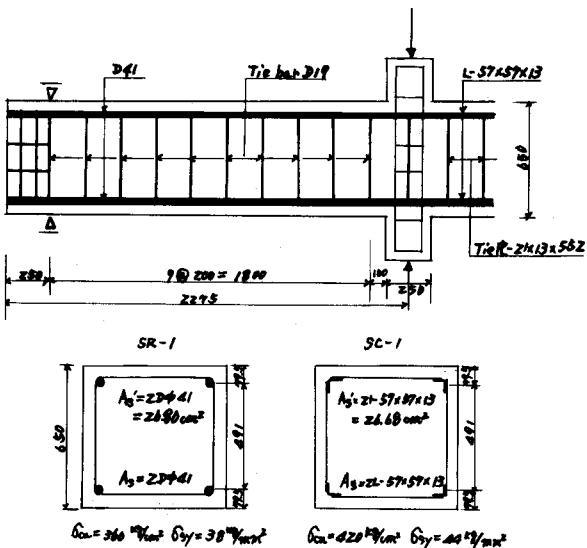
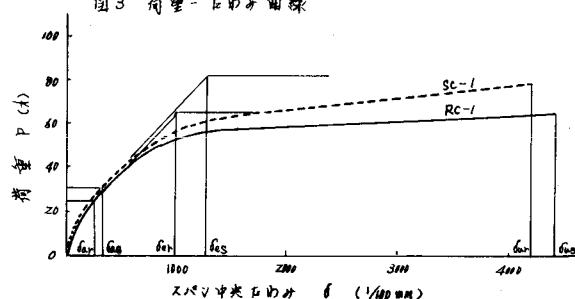
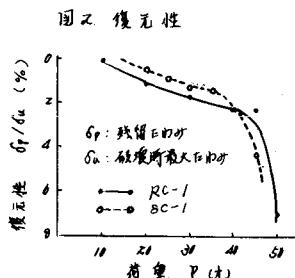


図2 荷重-正ひん筋曲線



重付近から急激に低下し、低下する荷重は R C の場合 45 t ( $P/P_u = \text{約} 70\%$ )、SC の場合 40 t ( $P/P_u = \text{約} 50\%$ ) で R C の方が大きい。これと R C と SC とのコンクリートの曲げひびき状態が相異ずることは(表 3) まとめると思われる。

(2) じん性 鋼材の変形能を最大に保つと弾性荷重との比  $M_s = f_{y}/f_e$  で、工字ルーブ吸収能を最大変形容量と弾性変形容量との比  $M_w = M_w/M_e$  で示すと、表 2 のようになる。また、鋼材の伸び率と破壊荷重耐性荷重と許容荷重耐性荷重との比で定義すれば、表 1 のようになります。鋼材のじん性は R C と SC とではほとんど差異はない。しかし R C の方が幾分大きい。

(3) 振動特性、減衰率 正負反復荷重を加えてときの荷重一定における鋼材の履歴ループの面積  $\Delta W$  と位置エネルギー式  $W$  の比  $R = \Delta W/W = \frac{1}{2}\pi^2 \frac{\text{ABCD}}{\Delta AOE + \Delta COF}$  (図 5) を求め、振動時の減衰性を評価した。且  $S = 1$ 、等価粘性減衰定数  $\beta = \frac{1}{2\pi}R$  と荷重との関係を示した。これは R C と SC とではほぼ一致しており、荷重約 40 t における  $\beta$  は約 5% である。

(4) ひびわれ中 実験体測面の正負軸鉄筋の同心位置に 6 cm 間隔に埋込んだ鉄片上の標尺間の距離をコンタクトゲージを用いて測定し、コンクリートの引張ひびきを無視してひびわれ幅を求めた。実験結果は表 3 のようだ。同じ鋼種応力度におけるひびわれ中では SC の荷重は R C の約 1.5 倍である。又、R C の有利性が示されている。

#### 五、ねりり鉄筋試験

ねりり鉄筋試験試体は鉄筋 = 2 Φ 12 にて 2 個と試験コンクリート 1 個である。且、図 5 に示すように軸

図 4 等価粘性減衰定数

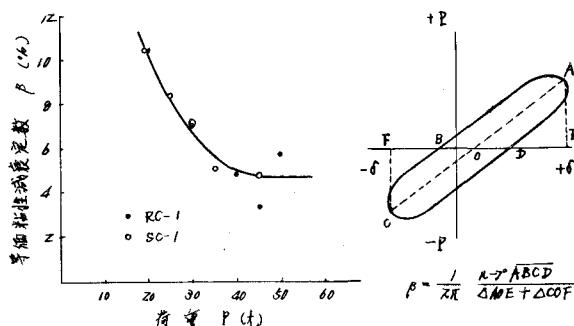


表 1. じん性

試験 材	荷重 耐量 P <sub>u</sub> (t)	許容荷重耐 量 (G+H) (mm) P <sub>e</sub> (t)	破壊 荷重 P <sub>b</sub> (t) △P <sub>b</sub> × 10 <sup>3</sup> (mm)	破壊荷重耐 量 P <sub>b</sub> (t)	荷重 耐量 P <sub>w</sub> (t)	じん性 M <sub>w</sub> /P <sub>e</sub>	
RC-1	25.3	260	4.0	45.9	4410	246.1	61.7
SC-1	30.5	310	6.0	82.5	4184	262.7	41.1

注) 許容荷重は  $f_{sa} = f_{y}/2$  として求めた。

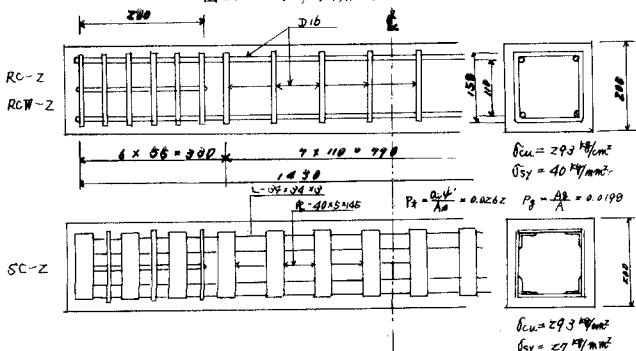
表 2. じん性

試験 材	鋼材在押付時			最大引抜荷時			じん性 $M_w/M_e$	
	最大荷重 P <sub>o</sub> (t)	変形量 $f_{max}$ (mm)	変形容量 $f_{e}$ (mm)	最大荷重 P <sub>u</sub> (t)	変形量 $f_{max}$ (mm)	変形容量 $f_{e}$ (mm)		
RC-1	54.0	9.9	35.6	65.9	4410	246.1	4.5	6.9
SC-1	61.0	12.60	34.4	82.5	4184	262.7	3.3	4.8

表 3 ひびわれ中

鋼種応力 (kg/mm <sup>2</sup> )	平均ひびわれ幅 (mm)		$SC/RC$
	RC-1	SC-1	
2000	0.21	0.08	1.62
2500	0.30	0.03	1.43

図 5. ねりり鉄筋体



方鋼鋼材比  $P_0$  と子母鉢引鋼筋鋼材比を同一としており、RC供試体工個より 1 個は軸方向鉄筋とスチーラップと直角にはり鉄線で結束したもの (RC-Z)，他は接合部をエレクロースト溶接したものである。

図 6 ねり試験状況

図 6 に示すように、供試体の両端に鉄筋をボルト締めし、アーム長さ 30cm として船底荷重を載荷し、純ねりを実施した。荷重は正方形載荷のまゝとし、0.5t の増加ごとに 0.6t にもとて繰返し載荷とした。

各荷重段階で供試体中心から 10cm の位置にセントラルアーム尖端の変位を 100mm タイマーラグードで測定して回転角を求めるものとし、鋼材の応力度を測定した。

左右し、使用した鉄骨と鉄筋の降伏点が著しく相異しないので、SC は鉄骨の降伏点よりねり破壊を防ぐことなく、RC はコンクリートの破壊によるねり破壊を防ぐことなく、变形特性の比較が十分でなければならぬ。

(1) 複元性 図 8 は各種の RC 供試体にて、ねりモーメントと純回転角との関係を示したもので、弾性範囲では両者に差異は認められず左のとおり、これを超過した場合には、軸筋とスチーラップと直角溶接した場合の方が鉄線結束した場合より多くれども左。

(2) ピン性 鋼材のじん性を調べた試験の場合と同様に定義すれば、弹性変形、最大変形、弹性変形容量、最大変形容量 (図 7) がとくじん性の表中のようになり、軸筋とスチーラップとの接合により、ピニ性は約 1.5 倍となる。以下に定義とのようであり、溶接したもののねり回転角結果の場合は約 1.4 倍となり、溶接の場合の有利性が認められる。

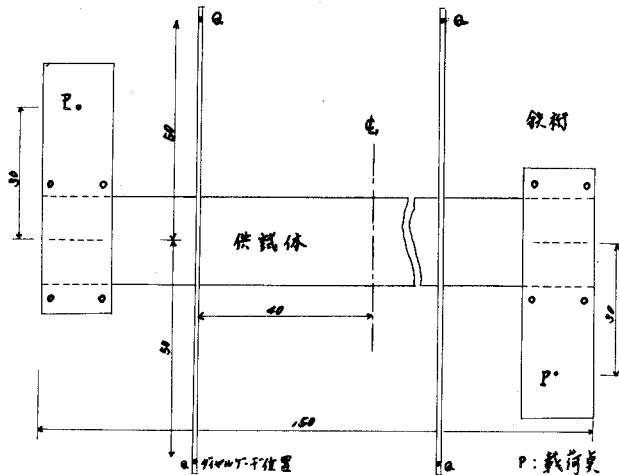


図 7 ねりモーメント-回転角曲線

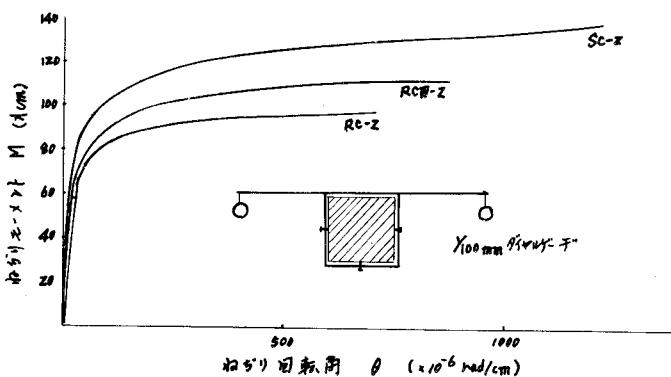
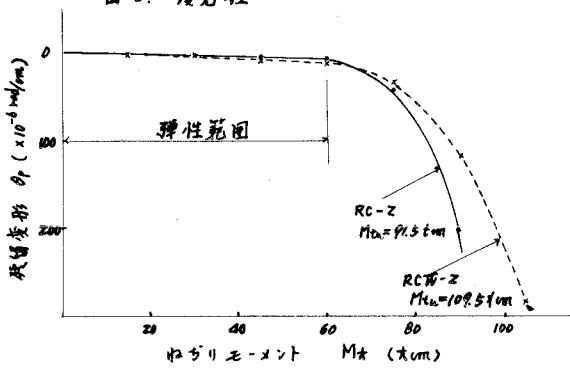


図 8. 複元性



(3) 拘引剛性 供試体の彈性範囲における拘引モーメントと回転角の関係は图9に示すとおりで、SC, RCW および RC の各構造の拘引剛性を次式で算出すれば、実験値によく一致する。

$$\theta = \frac{M_t}{G I_p} \quad \theta : \text{拘引回転角 (rad/cm)}, \quad M_t : \text{拘引モーメント (tcm)} \quad G : \text{せん断弹性係数}$$

弾性係数 ( $\text{kg}/\text{cm}^2$ )  $I_p$ : 断面 = 次元  $= \text{次元} \times \text{次元}^2 (\text{cm}^4)$

$$\text{拘引剛性} : G I_p \quad \text{SC} \quad G I_p = G_c I_{cp} + 0.9 G_s I_{sp}$$

$$\text{RCW} \quad G I_p = G_c I_{cp} + G_s I_{sp}$$

$$\text{RC} \quad G I_p = G_c I_{cp} + \frac{1}{2} G_s I_{sp}$$

ここで,  $G_c$ : コンクリートのせん断弹性係数 ( $\text{kg}/\text{cm}^2$ )  $G_s$ : 鋼筋のせん断弹性係数 ( $\text{kg}/\text{cm}^2$ )

$I_{cp} = \text{次元} - \text{次元}^2 (\text{cm}^4)$  全断面の断面積 = 次元  $- \text{次元}^2 (\text{cm}^2)$   $I_{sp}$ : 鋼筋の断面積 = 次元  $- \text{次元}^2 (\text{cm}^2)$

次元のエクスカージーの断面積 = 次元  $- \text{次元}^2 (\text{cm}^2)$   $I_{sp}$ : 鋼筋の断面積 = 次元  $- \text{次元}^2 (\text{cm}^2)$

剛性が又より一層高くなる場合がある。通常の RC 構造の場合 < 3 度, 鋼筋の拘引剛性を約 4 倍とするほどである。

小型供試体の拘引試験結果は图9である。当該表を表3。

表4 拘引刚性

供試体	彈性変形時			最大変形時			剛性	
	初期モーメント + $M_a$ (tcm)	変形量 $\theta_a$ ( $\text{rad}/\text{cm}$ )	変形荷重 $P_a$ ( $\text{kg}/\text{cm}^2$ )	初期モーメント + $M_a$ (tcm)	変形量 $\theta_u$ ( $\text{rad}/\text{cm}$ )	変形荷重 $P_u$ ( $\text{kg}/\text{cm}^2$ )	$M_u = \frac{\theta_u}{\theta_a}$	$M_a = \frac{P_u}{P_a}$
SC-Z	116.7	36.3	1.77	138.0	132.5	163.3	39.7	92.4
RCW-Z	108.5	36.1	1.71	109.5	87.0	87.7	24.1	51.1
RC-Z	89.6	36.5	1.53	91.5	70.4	60.8	19.3	39.7

表5 拘引刚性

供試体	許容拘引モーメント			破壊拘引モーメント			剛性	
	初期モーメント + $M_a$ (tcm)	変形量 $\theta_a$ ( $\text{rad}/\text{cm}$ )	荷重 $P_a$ ( $\text{kg}/\text{cm}^2$ )	初期モーメント + $M_a$ (tcm)	変形量 $\theta_u$ ( $\text{rad}/\text{cm}$ )	荷重 $P_u$ ( $\text{kg}/\text{cm}^2$ )	$M_u$	$M_a = \frac{M_u}{M_u}$
SC-Z	46.0	13.5	0.311	138.0	132.5	163.3	526	
RCW-Z	38.5	10.7	0.195	109.5	87.0	87.7	449	
RC-Z	30.5	12.4	0.189	91.5	70.4	60.8	322	

$$M_a = \frac{M_u}{\theta_u} \times \theta_a$$

图9 拘引剛性の実測値

